

あいらの歴史と物語

発行責任者 始良歴史ボランティア協会

会長 宮内 伸一

編集者 研修部 迫村 あけみ

連絡先：〒899-5421 鹿児島県始良市東餅田 498

始良市歴史民俗資料館 0995 (66) 1553

歩き・み・ふれる歴史の道「潮風しおかぜ香るなぎさなぎさを往く」

始良市教育委員会 社会教育課文化財係 池田 亘

令和5年5月27日(土)に実施した歩き・み・ふれる歴史の道は、松原地区の八坂神社やさかから始まり、松原・脇元地区の錦江湾沿岸を歩き、最後に白銀坂しろかねさかの一部を登る全長約9kmの行程でした。道中、松原地区と重富地区の史跡の解説のほか、今回の目玉として、くすの木自然館はまもとぼくの浜本麦さんに重富海岸や干潟・始良カルデラについて解説していただきました。



錦江湾について説明する浜本麦さん

錦江湾奥部は、約3万年前に大噴火を起こした始良カルデラに海水が流れ込んでできた海で、湾奥部は波が穏やかで開発に適しており、松原地区には干満の差が大きい遠浅の海岸を利用した入浜式塩田いりはましきがありました。明治5年(1872)に帖佐戸長・米良佐平太の責任で本格的な塩田造成が始まりました。大正3年(1914)に桜島大噴火による地盤沈下と高波による被害を受けましたが、当時の帖佐村長・蓑毛三蔵みのもさんぞうが大正12年に復旧工事をほぼ完成させ、製塩は帖佐村の大きな財源となりました。昭和25年(1950)には年間3千トンを生産していましたが、昭和26年10月14日のルーヌ台風で大きな被害を受けたため、同年12月、町議会は製塩業を放棄することを決め、帖佐松原塩田は約80年の歴史に幕を閉じました。



思川河口付近での説明の様子

現在、塩田跡は調整池やヨシ原が広がり、多くの生き物が暮らす貴重な場所となっているそうです。

今回の行程は、平成30年度以来久しぶりの1日がかりのコースでした。参加者全員が歩ききり、多くの文化財にふれ興味を持ってもらえたのではないかと感じた1日でした。

鎌倉時代のみさと台丘陵地域

竹之下 洲 一

令和5年3月18日(土)、「中世の帖佐を歩く」と題した史跡巡りを実施しました。多くの参加者があり、みさと台団地から青葉台・朝日ヶ丘団地周辺を巡りました。

鎌倉時代の帖佐は、別府川右岸のみさと台丘陵地域(みさと台・朝日ヶ丘団地)を中心に発展したと考えられます。この地域は別府川を利用した水運の便がよく、丘陵山頂は別府川河口から中流域の蒲生地区までを監視できる位置にあります。帖佐を治めるには好都合の場所だったと考えられ、みさと台の中央尾根と五社神社を結ぶ線上には鎌倉時代の役所や居館が存在した可能性があります。



筆者の説明に聞き入る参加者

また、みさと台団地周辺の自然の崖面には、古いガマ(洞窟)や磨崖仏と考えられるものが見られ、仏教が華やいた鎌倉時代を強く感じ取ることができます。

室町時代になると、政治の中心は次第に別府川左岸の鍋倉や三拾町のあたりに移り、さらに安土桃山時代になると、島津義弘が宇都に居館を構えていくこととなります。

鹿児島城と鶴丸城

迫村 あけみ

7月13日(木)、私たち始良歴史ボランティア協会は、黎明館及び鹿児島市文化財課の方々にご案内いただき、研修の一環として令和5年3月に国の史跡に指定された鹿児島城跡を見学しました。

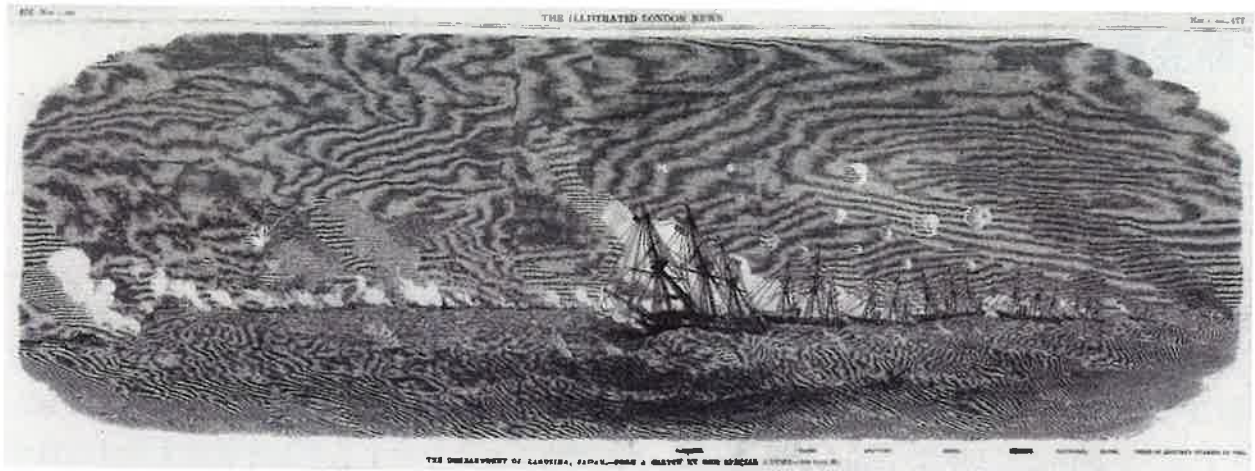


黎明館学芸員の説明を受ける協会員

鹿児島城は、慶長6年(1601)に薩摩藩初代藩主・島津家久によって築城され、現在の黎明館の地に建てられた居館と、その後ろにある廃城になっていた上山城を改修した城山から構成されています。築城時は、城山に防衛機能を持たせ、行政機能は居館に置かれていました。慶長20年(1615)頃に城はほぼ完成しますが、時代が下がるにつれて行政機能がより重視されるようになり、居館が中心となっていました。

現在、一般的には「鶴丸城」という名で知られていますが、正式名称としては「鹿児島城」が使われ、江戸時代から現在までの正式な文書にも「鹿児島城」と記されているそうです。

今回見学した鹿児島城は、御楼門だけでなく能舞台跡・排水溝跡・移築庭園跡・中世に作られた上山城の土塁など、まだまだ私たちの興味をそそる「お城」でした。



『イラストレイティッド・ロンドンニュース』挿絵(1863年11月7日号) 館蔵

歴史民俗資料館 令和5年度 夏季特別展「前の浜の戦(いっさ)―薩英戦争―」の開催

始良市歴史民俗資料館館長 下鶴 弘

始良市歴史民俗資料館2階において、上記特別展を9月24日(日)まで開催しています。

薩英戦争は、江戸時代の終わりの文久3年(1863)7月、錦江湾を舞台に薩摩藩とイギリス艦隊の間で起こった戦いです。風雨の中の2日間の戦いで、イギリス艦隊7隻が鹿児島城下を砲撃して各砲台を破壊し、城下町の1割を焼きました。薩摩藩も砲戦を続け、イギリス側は13名の死者と50名余りの負傷者を出し、薩摩側の死者は5名でした。戦争の勝敗は、互いに被害が大きかったので引き分けでしたが、この戦いを通じて薩摩藩とイギリスはお互いの実力を認め合い、明治維新に向かって信頼関係を築いていきました。

今年は、鹿児島で「前の浜の戦」と呼ばれた薩英戦争から160年の節目の年です。鹿児島の歴史を始良市歴史民俗資料館でひもといてみましょう。

《展示物の紹介》

特別展の期間中、正面玄関を入ったところにひと際目立つものが展示されています。それは、オデタイ(芋ゆで桶)と呼ばれるもので、加治木郷土館が所蔵するものです。

オデタイとは、本来植物の芋麻(カラムシ)などをゆでて繊維を取り出すために使われた、大きく細長い木製の桶です。高さは約2.5m、直径65cmで、上部には吊り下げ用の竹の輪が付いています。

『日置町郷土誌』内の「文久3年(1863)の薩英戦争で、イギリス艦隊の砲撃により薩摩の大砲は破壊されたが、台場にいた日置領主がオデタイを大砲に見せることを思い付き実行したところ、イギリス艦隊は驚いて錦江湾から去っていった」というエピソードに因み、今回展示しています。



《新会員紹介》

令和4年度に新会員を募集したところ、令和5年度4月より3名の方が新たに入会されました。現会員の高齢化が進み憂慮していましたが、これで一安心といったところです。名簿順に自己紹介文を掲載します。

中村 美千代 さん

加治木に居住して二十数年、PTA 活動を通して始良市の歴史や文化に触れる機会を得ました。

それまで、島津義弘公のお名前も全く知らず、直木賞作家の海音寺潮五郎氏かいおん じちよう ごろうや『二つの祖国』の主人公のモデルとなった伊丹明氏が旧制加治木中学校出身であることも初めて知りました。今後ボランティア活動参加を通して多くの方々との出会いや新発見が楽しみです。

前田 聡子 さん

学び直しの芸術大学時代に、「西餅田焼」を卒論のテーマにしました。

歴史に疎うとすぎたため、まず助けを求めたのが現在の始良市歴史民俗資料館の下鶴館長でした。それからは多くの方に力添えをいただきながら一つ一つ乗り越える日々でした。

歴史ボランティアの活動は、その時の御恩を少しでも返したいという気持ちで始めました。

芸術学と民俗学・歴史遺産の側面からアプローチしてみたいです。

いつまで続けられるかな、とは思いますが、楽しみながら協会の皆さんについていきます。

なお、ヒストリーアイラという SNS を開設しています。ご興味のある方は下の QR コードからアクセスしてみてください。



西 慎一郎 さん

もともと歴史好きであったので、仕事を辞めたら歴史を学びたいと常々思っていました。歴史ある街を旅するのが好きですが、始良市に住んで二十数年になるのに、始良市の歴史について何も知りませんでした。

今後、始良市の史跡や文化財について勉強し、分かりやすく伝えられるよう努力していきたいと思えます。

編集後記

今年(2023)は、本文で紹介しましたとおり薩英戦争勃発 160 年にあたり、一方では蒲生八幡神社創建 900 年にもあたります。

指定文化財が鹿児島県で一番多いとされる始良市には、毎年のように周年記念となる史跡が存在しています。我々歴史ボランティア協会会員にとっては、真価が問われる場面も多く、忙しいながら充実した毎日を過ごしています。

紹介しましたように3人の方が新たに入会されました。まことに心強く思っています。我々に共通するのは「歴史が好きだ」ということです。

この広報誌をお読みになって、歴史に関する興味や関心をお持ちになった方は始良市歴史民俗資料館(0995-65-1553)までご連絡ください。一緒に学び、楽しみましょう。

編集子